

誰がこれを造ったのか

— 社会への責任、そして次世代へのメッセージ —

平成20年度 土木学会会長提言 より

第2回

今号から3回にわたって「土木技術者の無名性」に関わる幾つかの論点について紹介していきます。今回は、昨年11月に開催された土木の日記念行事シンポジウム「パネルディスカッション—匿名性からの脱却—」にコーディネーター、パネリストとして参加されたお二人にそれぞれの立場からのご意見を頂きます。

土木仮面との別れ

京都大学大学院工学研究科 社会基盤工学専攻
教授 宮川 豊章

鉄腕アトムがハリウッド経由で映画化されたらしい。私自身は鉄腕アトムを雑誌でかろうじて読んだ世代であるが、あまり雑誌を買ってもらえなかったことにも起因して、むしろテレビのほうが印象に残っている。テレビでは、アニメ鉄腕アトムより少し前に月光仮面をはじめとする仮面ものが一世を風靡した時代があった。秀麗な仮面あるいは覆面をつけている方が正義の味方であり、醜悪なものをつけている方が悪人だと信じたものである。

土木技術者月光仮面論なるものがある。♪どこの誰かは知らないけれど、誰もがみんな知っている♪、のが月光仮面である。月光仮面という呼び名・仮の名称はあるけれども、個人の顔は無く、実質上は無名である。この無名性は仮面をつけた人の実利を拒むイメージがあり、ストーリー上重要なのである。土木施設が、その計画・設計・施工・維持管理者の名前と共に語られる場合はまれである。土木技術者は、無名碑などに象徴されるように、個人の名前で顕彰

されることは少なく、縁の下の力持ち的な働きに誇りを持っていたように思う。言わば、土木仮面なる秀麗な仮面をつけていたのである。この事自体は素晴らしい事であり、今となっても誇るべき事であったと思っている。

その昔土木技術者は、荷重、環境などの作用を代表とする自然と対話する事が最も重要であり、この対話を基に土木施設を作り、使いこなしてきた。これに対して今は、土木構造物の真の所有者は市民であることがあらためて確認され、市民の意思というものが計画・設計・施工・維持管理上重要となってきた。すなわち、社会と対話する事がきわめて重要となったのである。さらに、持続可能性が重要視されるようになると、過去から未来へと続く歴史が重要となる。言わば、自然環境という空間、社会環境という人間、歴史環境という時間の3次元環境での対話が必要となっているのである。

しかし、人間と対話する場合には、個人

の顔を露にして話す必要がある。人は〇〇大学、〇〇省、〇〇社そのものと直接話すことはできない。現実にはそれらの組織に所属する個人そのものと相対して話しあうからである。組織名のみではなく、個人名が無ければ真に対等な対話は成り立たない、もちろん市民が心許すはずもない。土木技術者に対して、個人が、仮面を取った個別の顔が真摯に要求されるようになったのである。

品確法施行以降、低価格入札、談合の破綻など、種々の議論が為されている。談合はともかくとして、超低価格入札の弊害は顕著に現れているように思う。恒産なければ恒心なし、と言う。やはり、適切な対価とともに技術は語るべきである。歪んだ低価格では、適切な対応はきわめて困難である。これに対応するための努力が今種々のところでなされ、その成果に期待するところである。

品確法、総合評価でゆれる今は、まだ齟齬はあるものの、実は土木技術者が本来の技術で語れる時になったのだと言えよう。

土木技術者の無名性 — 施工者の立場から —

私は大学卒業後直ちに今の会社に入社し、約25年間主に現場で施工を担当して来た。比較的大型現場が多く、その中には土木学会の田中賞受賞作品が3現場入っており、最後に従事した東京湾横断道路にあっては同技術賞を受賞するという幸運にも恵まれた。

しかし、これらの工事に私が携わったという事実は、私の履歴書に記入されている程度で、私個人の名前も会社の名前もいず

言い換えれば、技術を語るべき時なのであると思う。この場合、仮面をかぶって語るべき場面もないではないだろう。しかし、自然、社会、歴史と語り合った人間には自ずとその素顔が表れる。そのような技術者が評価される筈である。技術者として語る時、常に所属する組織という仮面をかぶって語らざるを得なかった時代は終わったのである。したがって、土木人としてのみではなく、個人としての名誉もまた顕彰される時が来たと思っている。

月光仮面ならぬ土木仮面とはお別れである。人間の顔をした、仮面をとった土木技術者が胸を張って働ける時代が来た。私は大学に籍をおいている。毎年優秀な修了生・卒業生を送り出しているつもりである。そのような教え子が巣立ってゆく社会というのが気になる。土木人としての責務は確固として社会から要求されている。これに、名誉と対価が伴えば、大学人にとっては、これでこそ卒業生を安心して送り出せる社会となると言えるのかもしれない。

大成建設(株) 代表取締役専務役員
土木本部長 小林 将志

れ忘れ去られるだろう。まさに土木技術者の「無名性」そのものだと思う。しかし、この事について、当時も今も余り深く考えた事がない。その匿名性が不当であるとか、苦勞の割には社会的評価が低いとか、そのような不満を持った記憶がないのである。それは、その匿名性が我々の仕事の特性であり、さらに言うなら、日本の社会における土木事業者の特性であるわけで、“己が無名性も仕方のないこと”という納得の感

情であろうと自己分析をしている。

では、その特性とは何か？ 次の様な要因が挙げられるであろう。

ひとつは、我が国においては計画・設計は発注者であり、プロジェクトに関する責任は基本的に発注者にあるという原則にある。最近では、設計・施工という案件も散見されるようになり、施工者の責任範囲も拡大しているが、基本的にはプロジェクトの責任者は発注者なのである。

2つ目の要因は、工区・工種毎に異なる施工者を選ぶ“細切れ発注”にある。私は横浜ベイブリッジの工事にも携わったが、それは主要橋脚4基の内の2基であり、ましてや橋梁工事の花形である上部工部分は、橋梁メーカーJVが担当したのである。このような状況下では、「横浜ベイブリッジは私が造りました。」と胸を張って言う事も憚られ、それ故に、口に出せないもどかしさも感じるのである。

さらなる要因は、重層構造の施工体制にある。鉄筋を組んだり、コンクリートを打設したりの実際の作業は、元請業者である我々ゼネコンが直接担当する訳ではなく、下請負契約をした下請負業者が施工する体制となっている。

このような幾つかの要因が、我々の仕事の「無名性」を作り上げていると考えられるが、ある意味ではこれらは日本社会の特異性でもあらうと思う。全員参加の共同作業によって一つのモノを作り上げ、その結果責任も全員で分担して（シェア）負うという構造が、「無名性」にも結びついているのではないだろうか？

海外における例や、日本国内においても著名な建築物を手掛けた建築家の「有名性」

に比べると（建築物における施工者等の無名性は、土木構造物のそれと大差は無いが）、土木技術者の無名性は致し方ない面があると思われる。

この無名性が土木技術者の社会的評価を下げ、その結果、若い世代の土木離れに結びついている、と言う論には一概には賛成し難い面がある。むしろ、日本の繁栄を下支えしている「インフラの重要性」を、社会に再認識（PR活動）させる事の方が大事ではないだろうか？ また、インフラの重要性・必要性は全世界共通である。我々ゼネコンのあり方として、持っている人材・技術・信用力を武器に、海外に出て行き、（古い言葉ではあるが）外貨を獲得して、日本の繁栄に役立つことが、土木技術者としての社会的評価を向上させ、若者の土木離れに歯止めをかける方策ではないかと思う。ゼネコンの海外進出は必然、必須の途だとも思うのである。

ちなみに、自動車産業やIT産業等々、そこで働いている技術者も我々と同様に「無名性」の部類に入るが、それだからと言って彼らの社会的地位が低い訳ではない。彼らの地道な努力によって、安くて品質の良い物を作り上げ、それが我々の生活を豊かにし、かつ海外に輸出して日本の繁栄を支えているという社会の認識があるからであらう。

とは言いながら、我々土木技術者の努力、ひたむきさ等が社会で正當に評価されていないという気持ちも大いにある。

土木学会の会長提言特別委員会が出された、「土木構造物の完成時に、プロジェクト名称の他に関わった技術者名等を記した銘板を設置する」という提案には賛成であ

る。心情的にも大いに喜ばしい事であるし、土木技術者の社会的評価向上にも役立つことに異論はない。ただ、前述の通り、我々の仕事が「社会に貢献している」ことを、

社会に対してアピールすることはもちろん、大事なことは、誠実に、ひたむきにモノ造りを続ける事である。

コラム

顔の見える土木技術者に—土木技師八田與一

(社)土木学会 専務理事 古木守靖

戦前活躍した偉大な土木技術者の一人に八田與一がいる。

八田は1910年東京帝国大学土木科を卒業後直ちに台湾総督府に入り、台湾の開発に従事する。いくつかの事業の中で彼の生き様を決定付けたものが、有名な嘉南大圳すなわち烏山頭ダム建設を始めとする嘉南平野の灌漑事業である。烏山頭ダムは堤体延長1,273mで当時東洋一の大アースダムであり、用水路の延長は1万6,000kmにも及ぶ(写真1)。

華南大圳実現のために八田が採用した技術は当時世界最高水準であったが、さらに人々を引き付けるのは八田がそこに生きる住民のことを考え抜いて発想したことにある。たとえば、開発される水量では嘉南平野すべてを潤すことが不可能だと知ると、平野を3地区に分け、3年輪作という方法で、すべての人々がダムの恩恵を受け生活が向上するようにした。これは単に食料増産目的からの発想ではない。

また工事に当たっては、日本内地から来た人と現地の人を分け隔てなく扱い、関係者が家族で住めるように、学校や郵便局もある新しい町を建設した。工事中の事故や病死により失った仲間の慰霊碑には、八田による銘文と犠牲者の名前が、誰彼の区別も無く記されている(写真2)。

彼を知る人たち、あるいは幼少時代を烏山頭で過ごした人たちからは、「自分も八田與一のようになりたいと努力した」とか、「父は口癖のように八田與一を見習って立派な人間になれといっていた」といった思い出話を聞かされる。そして命日の5月8日には、今も地元の人達によって墓前祭が執り行われる。

八田は人々のために、かつ人々と一緒になって嘉南大圳を作ったのだ。

その坐像は戦時中は金属製品の供出の、あるいは蒋介石時代には日本の顕彰碑として破壊の対象であったが、地元の人々の機転で密かに保存され、今も烏山頭ダムを見守っている(写真3)。

写真1

烏山頭ダムの余水吐き



写真2 烏山頭ダム殉工碑
中ほどの銘板に殉職者の氏名が記されている



写真3 八田與一の像と夫妻の墓

八田のように担当した技術者の人となり人々に伝っていること、言わば顔が見えることは人々が技術者、そして技術を信頼する第一歩であり、これは時代が移ろい、施工の体制が変化しても変わらぬ真実であろう。これからも土木技術者たるものの顔の見える技術者を目指してほしい。それはもちろん売名行為としてではなく、民衆のために社会基盤整備を行っている技術者の矜持の証としてである。